

# コロナに強い放射線治療

## がん社会 を診る

中川 恵一

コロナの流行で、がんの新規診断数が著しく低下していることが国内外で明らかになっています。今後がん死亡数が増加するという予測も報告されています。

横浜市立大学などの研究グループは、コロナの流行後は流行前と比べて、新規がんの診断数が胃がんでは27%、大腸がんでは14%と有意に減少していることを明らかにしました。ステージ別では、胃がんと大腸がんのステージ1はそれ

ぞれ、36%、34%の減少でした。大腸がんのステージ2でも35%減でしたが、リンパ節転移のあるステージ3では7割近くの激増でした。

早期がんが減って、進行がんが増えたわけですから、これらががん死亡が増えることは間違いありません。

横浜市立大学付属病院の堀田信之医師は、コロナによって、20年に診断されたがん患者数も手術数も激減していることを論文にまとめ、国際学

術誌で発表しました。

研究グループは全国のがん患者の7割をカバーする一院内がん登録データを解析し、胃がん、食道がん、結腸がん、直腸がん、非小細胞肺がん、乳がん、前立腺がん、子宮頸(けい)がんの診断患者数と切除患者数を調べました。いずれも日本人に多いがんばかりです。

16〜19年度の患者数から推定される20年度の患者数に比べて、すべてのがんで現実の患者数は減少していました。

臓器別には、胃がんが12%、食道がんが9%、結腸がんが8%、直腸がんが9%、非小細胞肺がんが8%、乳がんが8%、前立腺がんが12%、子宮頸がんが8%、少なくなっていました。

また、進行がんより早期がんで診断数の減少割合が高いことも明らかになりました。

診断される患者の数が減っていますから、切除数も予測値より減っています。

胃がんが14%、食道がんが13%、結腸がん、直腸がんが9%、非小細胞肺がんが11%、乳がんが11%、前立腺がんが12%、子宮頸がんが12%の減少となりました。主ながん10種で合計、約2万9千人分のがんの切除機会が失われたと推定しています。

一方、放射線治療の件数はむしろ増えています。東大病院の場合、増加が顕著で、日本人男性に一番多く、9人に1人が罹患(りかん)する前立腺がんでは、2020年に初めて、手術件数を放射線治療の件数が上回りました。

実際、前立腺がんの放射線治療では、早期から進行例まで5回の照射ですみます。入室から退室までは7分たらず。照射を受ける時間は約2分で、何も感じません。「コロナに強い放射線治療」の面目躍如です。

(東京大学特任教授)



イラスト 中村 久美